



飛行機写真を撮ろう！

大阪国際空港の南端に接する千里川土手(原田中)はテレビでも紹介され、全国から飛行機好きが集まる「飛行機写真の聖地」と言われています。



「飛行機写真を撮り続けて50年」

小学生のころから空を飛んでいる飛行機が大好きだったという津上亮平さん(新千里東町)・高校生時代から50年以上にわたり大阪国際空港で飛行機の写真を撮り続けて、大学生時代にはほとんど毎日のように空港に来ていたそうです。いまも週に1、2回は通っていて、パイロットをはじめたくさんの方の空港関係者とは顔見知りです。

「大阪国際空港から飛び立つ飛行機は、急角度で高度を上げたあと機体を左に傾けて旋回します。そのときには地上からでも飛んでいる飛行機のボディの側面を撮れるのです」と話す津上さんの写真は、雑誌や新聞などさまざまなところで掲載されており、アメリカの著名な業界専門誌のコンテストで1位になったこともあります。また、飛行機写真の愛好家を使う「練炭ジェット」(ジェットエンジンが一瞬赤くなる様子。1ページの写真参照)という言葉も最初に使ったのは津上さんで、雑誌編集者に「練炭のように赤くなる」と話したところ、雑誌の記事などで使われて広まったとか。

飛行機写真の歴史をつくっています。



津上さんがお気に入りの撮影ポイント。スライダントレッキングの原田中(西側)は駐車場から滑走路が一望できます。



雷鳥(左)とB747-400(右)。左下白鳥機B747-400は昭和52年(1977年)国内線に就航した「リムジン」は、国内に新路線を拓いた。ホライズン機も少ない大阪国際空港の通過機。全日本機種の図柄は、当時の社用機(左)と似たデザインだ。右は、当時の客室乗務員(右)の制服だ。



「飛行機写真愛好家の作品」



B787 Dreamliner。大型機並みの航路距離を誇る最新中型機。写真提供:西峯晃人さん。



夕焼け空のなか滑走路に向かう着陸機。写真提供:山崎淳司さん。



親子のように並ぶ2機の飛行機。写真提供:松村政信さん。

「変わらない千里川土手」

古い写真を見ても千里川土手で飛行機見物をする人はたくさんいました。いまも「きわう千里川土手で出会う」人に聞いてみました。

「自分が親に連れて来てもらったので、いまは自分の子どもを連れて来ています」

「大阪国際空港は東西南北どこからでも写真が撮れて、こんな恵まれたロケーションは他にありません」

「子どもに飛行機を見せたあと、消防訓練所で消防車を見せて帰るのが散歩コースです」

「東京から職場の仲間と写真を撮りに来ました。飛行機の近さに驚きました」



写真提供:津上亮平さん。

YS-11は戦後初めての国産旅客機。昭和40年から平成18年(2006年)まで国内定期路線で運航されました。下の写真は、東亜国内航空が運航した初代機。機体に合わせて客室乗務員の制服もオレンジでした。



※千里川土手の周辺には「トイレ」や「ゴミ箱」はありません。いちはお持ち帰りください。 ※お車の駐車スペースは限られています。 ※お車の駐車スペースは限られています。 ※お車の駐車スペースは限られています。